

# 対人支援の現場から

— 中動態を手がかりに —

安部 智海

## 序 論

「対人支援」とは、言うまでもなく困難や危機において人を対象にして行われる支援のことを指すが、近年、対人支援のなかでも「心のケア」や「寄り添う」という言葉を頻繁に耳目にするようになって久しい。しかしこの言葉が示す行為が何をもってその成否を分けているのかは、必ずしも明瞭ではない。支援対象の心に変化を起こそうと、身体的、心理的な様々なアプローチを指して「心のケア」と呼び、ある場合には支援対象の自立生活が、またある場合には環境変化や心境の変化などを目的に「寄り添う」という言葉が使われている。別々の目的を持つ支援方法が「対人支援」という同一の言葉で呼ばれることは、一般にその混乱を深める要因ともいえよう。

ミルトン・メイヤロフは、ケアの本質について、

一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることで

ある〈中略〉ケアすることは、自分の種々の欲求を満たすために、他人を単に利用するのは正反対のことである。〈中略〉相手が成長し、自己実現することをたすけることとしてのケアは、ひとつの過程であり、展開を内にはらみつつ人に関与するあり方であり、〈中略〉「相互に」成長するもの<sup>②</sup>。

※〔〕内は筆者補足

であるとし、また、

ケアする際に経験される相手との合一の体験は、寄生的関係で起こる合一とは異なっている。相手を支配したり所有しようと試みるのではなくて、私は、それが本来持っている存在の権利において成長すること、またよく言われるように「それらしくなる」ことを望んでいるのである<sup>③</sup>。

と、定義している<sup>④</sup>。ケアとは、ひとつの展開を内にはらみつつ人に関与するあり方であること。また、支援する／される当事人が相互に成長し、その内実は相手との合一体験を生み出すことであり、相手を支配・所有する試みではないという。

ところが我々が、「相手をケアする」という能動態でこの言葉を用いた場合、事態はたちまち混乱する。なぜなら誰かを支援しようとする、どうしても相手（自身や環境）に変化を強いる（支配・所有）という試みが始まってしまうからのである。その大きな原因は、支援者と被支援者（能動／受動）として、両者の関係が行為に先立ち、あらかじめ定位されてしまうことにあると考えられる。一度その関係が定位されてしまうと、「支援」という言葉から能動／受動という関係以外は想像することすらできなくなってしまうだろうし、私たちの使う文脈で「私

が相手をケアする」とは、まさにそうした事態（能動／受動）を指す行為だからだ。本稿の問題点は、ここにある。

本稿では認定NPO京都自死・自殺相談センター（以下、Sotio）の活動や実践事例をとおして対人支援について考察を進め、対人支援の一形態を位置づけるが、Sotioが示す対人支援は、必ずしも困難や危機的な状況そのもの（や相手）の変化を求めるものではない。まずはその困難や危機のなかにありつつも「孤独感が和らぐ」ことをもって支援の成否とする。しかしこの活動の成否を分ける「孤独感が和らぐ」という事態を、能動／受動という関係で説明してしまうと、前出のとおり「私があなたの孤独感を和らげる」という記述になってしまう、そうした関わり方では、むしろ気持ちに関わる支援の根幹を損ねる恐れがあるのである（第一章第二節で詳述）。そのため本稿では、能動／受動という文脈から一旦離れてその関係性を捉え直し、中動態という文法概念を援用することで（第二章第一節で詳述）、支援関係における関係を定直し直すことを目的とする。すなわち、相手に変化を求めずに「孤独感が和らぐ」事態はいかにして生起するのか。支援の出発点においてこそ、支援する／されるといふ関係だったものが、いざれ支援の過程でその関係性をかえてゆく機微を、活動事例に確認しつつ、中動態という文法概念を手がかりに支援関係を捉え直す。

## 第一章 孤独感が和らぐ現場

### 第一節 認定NPO京都自死・自殺相談センター（Sotio）とは

認定NPO京都自死・自殺相談センター（Sotio）は、二〇一〇年に浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター

(現・総合研究所。以下、総研)の研究員と市民の一〇名で立ち上げられた自死の苦悩を専門的に扱うNPO団体である。<sup>5)</sup>

たとえばここにSolomの特徵として主なものをいくつか挙げるとすれば、

- ① 死にたい気持ちは特別な感情ではないこと
- ② 相談者と相談員は対等な関係であること
- ③ 死にたい気持ちも含めた相手の気持ちを、そのまま受けとろうとすること
- ④ どのような受け応えをするかという技法としてではなく、温かく関わろうとしていること
- ⑤ ロールプレイまたは相談の後のふりかえりは、どこまでも仮説であることを挙げることができる。

このことは、死にたい気持ちそのものに良し悪しはなく(①)、また相談員であるなしを問わず、死にたい気持ちは誰しもが抱きうる気持ちであること(②)、それゆえ、死にたい気持ちを否定しない。死にたい気持ちも含め、どのような気持ちも相手にとっては大切な気持ちである(③)。そうした気持ちに、どのような言葉がけや技法が有効なのかではなく、温かい関わりが大切であること。そのため相談員は素直な気持ちで関わり、その時々心の距離に注目すること(④)。一人ひとりがそれぞれにそれぞれの気持ちを抱いているのであり、同じ相手(自分)であっても気持ちは刻々と変化している(⑤)からであると説明することができる。

もう一つ大きな特徴は、この団体が自死を防止する団体ではないということである。団体の名称が「京都自死・自殺防止センター」ではなく、「京都自死・自殺相談センター」であることも、こうした姿勢の表れである。「防止」という言葉には、死にたい気持ちを感じてはいけないもの、抑止すべきものというニュアンスがあるが、死にたい気持ちは誰しもが抱く自然な感情であり、それをそのまま受けとろうとする団体であることを宣言する意味も

ある。<sup>6)</sup>

当活動の要諦は、死にたいほどの苦悩を抱えた方の気持ちをいかに「受けとる」ことができるかにある。ここで言う気持ちを受けとるとは、「苦悩する相手の気持ちを感じ、感じた自分の気持ちに気づき、その気づきを相手に伝えていく」という営みのことを指す。苦悩を抱えた方にとって、その苦悩（支援者には事の詳細は分からずとも、そこに何かがあること）に気づき、ともに在る誰かがいてくれるという出来事は、孤独感を和らげることにつながるひとつの機縁ともなるであろう。

一方で、支援者としても、誰かの死にたいほどの苦悩を抱えた方の孤独感が和らぐひとつの機縁となれたことに支えられていることも事実である。つまり、孤独感が和らぐ瞬間に起こっていることは、相談員が「した（能動）」だけでも、相談者が「された（受動）」だけでもない状況、相互に影響し合う場が立ち上がることである。Sottoではこの出来事を指して「心の居場所づくり」と呼ぶ。以下では、ロールプレイの具体的な様子を紹介し、死を考えるほどの危機、困難に陥った者の孤独感がどのような関わりのなかで和らいでいくのか、「心の居場所」について検討する。

## 第二節 模擬相談（ロールプレイ）の事例から考える

本節では、「心の居場所」について検討するにあたり電話相談を模した相談記録を参考に「相手の気持ちをそのまま受けとる」ということについて考える。

それに先立ち、まず序論で示した「相手を変え（支配・所有）しようとする支援」、能動／受動で関係が定位された支援を、本稿においてどのような意味で提示しているのか模擬相談記録をもとにみてみたい。

【事例】

「仕事のストレスを抱えており家庭状況もよくなかないか、自分なんていないほうがいいんじゃないかと思う」

相談者…最近、職場の人間関係がつらくて……上司に何を言ってもわかってもらえないんです

相談員…そういうときは、気にしないのが一番ですよ。あなたも考えすぎなんじゃないですか？とにかく

深く考えずに、趣味でも作ったらいいですよ

相談者………はい……（声が小さくなる）。実は夫との関係もうまくいかなくて……昨日も口論になつて

……

相談員…で、結局どうなつたんですか？

相談者…えっと、まだちゃんと話せていないんですけど……

相談員…じゃあ今後どうしたいんですか？離婚したいとか、そういうことですか？

相談者…いや、そこまでは……（困惑した沈黙）……誰にも必要とされていない気がするんです

相談員…そうですね。それは大変ですね。じゃあ今の生活状況を詳しく教えてください。朝は何時に起き

ていますか？眠れていますか？

相談者………なんか、もういいです

（相談終わり）

このやりとりにおいて、たしかに相談員は一貫して「相手に関わること（介入）」を志向している。相手の抱えた悩みに対し、気にしないよう助言し、趣味を勧め、状況を整理させ、今後の方針を選ばせようとするこれらの関わりは、一見すれば援助的に見えることだろう。しかしここで生じているのは、相談者の苦悩（孤独感）が受けとられることではなく、相談員が相談者を変えようとして、または変えるにあたっての事情聴取ともとれる行為が、関係の場そのものの成立を損ね続けている過程である。この事例は、「相手を変えようとする」行為が、相談現場において、いかに支援関係を容易に崩壊させてしまうかを示す極端な具体例である。

続いて、その対比として以下に示す相談記録は、SottoのYouTubeチャンネルにて配信されている『Sotto式相談対応の基本トレーニング方法』<sup>8</sup>より一部を抜粋したものである。この動画は、Sottoの相談員が、相手の気持ちを受けとるためのトレーニングとして相談者役／相談員役に分かれて行われる模擬相談の様子を収録したものである。

なお、記録のなかで便宜上、相談者の発言をC（電話をかける人コーラー Callerの頭文字）、相談員の発言をM（相談を受けるメンバー Memberの頭文字）とし、動画内でロールプレイが終了した後の相談者役／相談員役が役を降りることを宣言して、相談内容についてふりかえる事後検討部分についても言及する。<sup>10</sup>

※この模擬相談においてコーラー役を担ったのは筆者であり、相談中の（ ）内は動画の動きを筆者が補足したものである。

### 【事例】

「人間関係がうまくつくれず、ネットでやっとなだちができた。しかし、言葉の行き違いから関係が悪くなった。これで私の最後の居場所もなくなってしまった。現実世界ではもう生きていけない。」

C 1 .. やつと（友だちが）できたんですけど。誰も味方はいなくて。結局一人なんだなあ。結局、誰とも生きられないんだなあと思って。

M 1 .. そっか。やつとできたのにうまくいかなかったら、自分なんてって思わずにられないですね。

C 2 .. ずっとそう思っていました。ずっと自分なんてって思っていて。やつとできたのに、本当に些細なこと  
でケンカしてしまっ

M 2 .. ああ、そっか。

C 3 .. 人と人ってそんな簡単に関係壊れちゃうんだって思うと、もうやりきれなくて。

M 3 .. 一旦、こじれたり壊れたりしてしまうと、今まで上手くいつてきた時間とか、やりとり、あれすら  
嘘だったのかとかね。

C 4 .. 全部、嘘やったんやっと思って思うと……

M 4 .. 悲しくなるねえ。

C 5 .. （何度か頷き）何だったんだらうって。全部否定されたみたいな気持ちになって。やつぱり嘘だっ  
たんですかね。全部。

M 5 .. 嘘だったって思ったらね。全部イヤになるよね。

C 6 .. これ以上、誰とも仲良くなれる気がもうなくて。

M 6 .. そりゃあね、また新しく探そうっていう気になれないでしょうね。

C 7 .. どうせまた同じことになると思って。

M 7 .. ショックとか、傷ついた気持ちを思うと、そうでしょう。

C 8 .. 生きてることも、もう意味がないのかな。

M 8 .. 意味ない？

C 9 .. 楽しくないし、寂しいし

M 9 .. じゃあ、もう死のうと思ってる？

C 10 .. 思ってる。

M 10 .. そっか

C 11 .. もういいかなって。

M 11 .. 死んで楽になりたい？それぐらいもう毎日、耐えられないね。

C 12 .. (頷き) もう全部なかったことにしようかなって。

M 12 .. なかったことか。じゃあ、つらかったことも、寂しかったことも？

C 13 .. (頷き) もうそんなことばかり。何もいいことなかった。

(相談終わり)

冒頭C1では、やっとできた友達を失って、「誰も自分の味方はいない。結局、誰とも生きられない」という気持ちの吐露がある。それに対して、相談員の対応は、「(やっとできた友達との関係がうまくいかなかったら)自分なんてって思わずにいられないですね」(M1)という言葉を返している。友達の性別や事情、背景などを聞きだそうとするのではなく、最初から相談者の気持ちを受けとろうと、相手の気持ちを感じて、そのことを言葉として表現している。特に注目したいのは、C4、M4のやりとりである。相談者が「全部嘘やったんやと思うと……」という言葉から相談員がその気持ちを受けとって、そこで生じた自分の(そんなことがあったら悲しいだろうな

あ) という気持ちを「悲しくなるねえ」という言葉で素直に表現している。ここで相談者は何度も頷き返していることで、両者の気持ちの距離が近づいたことが窺える。

C8からの死にたい気持ちへの関わりについても、相談者の死にたいという気持ちを感じたら、M4と同様に相談員が即座に反応している。相談者の死にたい気持ちを相談員が忌避するのではなく、むしろ「もう死のうと思ってる？」(M9)と、相談者が言葉にする前の死にたい気持ちを感じとって、積極的にこちらから言葉にして踏み込み、温かく関わろうとする姿勢が感じられる。そのうえで「死にたい」に込められた気持ちを相談員側から尋ねている場面(M11)もある。これは、相談者がいまどういう気持ちでいるのかを感じとり、それを相談員が言語化したために、「死んで楽になりたい？」という言葉になったことが窺える。つまり、どの場面においても相談員は「相手の気持ちを感じ」て、「生じた自分の気持ちも感じ」、そして「言葉で表現する」という三つの行程を経ていることが分かる。

さらに、この模擬相談を終えたあとのふりかえりでは、M3の関わりについて相談者役は動画のなかで「すごく分かってくれる。代弁してくれているというか、それがすごく嬉しかった」という感想を漏らしている。相談事例の孤独による苦悩、それを誰にも打ち明けることのできなかつた孤独感は相談のなかで多少なりとも和らいでいたと言っていだろう。前出の模擬相談との違いも顕著である。

ここで疑問が生じるのは「相手の気持ちを感じて、感じた自分の気持ちを表現する」すなわち「相手の気持ちをそのまま受けとる」という関わりが実際に、相談者の「苦悩による孤独感」を和らげる保証があるのか。「相手の気持ちをそのまま受けとる」と言っても、それは相談員の勝手な解釈(誤解)ではないのかということだろう。「相手の気持ちを感じる」といっても、それがどれだけの精度で感じとれているのか、そしてそれをどれだけ言語化できているのかを計量的に判断することはできない。たとえば、相談員がそうした相手への感度を高めたり、なる

べく気持ちのすれ違いが起こらないようトレーニングを積んでいるとしても、どこまでも主観は免れないし、相談員側で分かったつもりになっている可能性も、もちろんないとは言いつれない。しかしそうした状況は、なにも相談現場に限った話ではなく、平素私たちは誰しもお互いを理解しているつもりで、誤解しているかもしれない関係性のなかを生きている。誤解が省みられることもない、それどころか、そもそも理解しようとしてもしてくれない状況と、誤解かもしれないが少しでも分かろうと誰かが温かく関わりを続けてくれようとする状況とは、雲泥の差がある。死にたいほどの苦悩を抱えたとき、生きづらさを感じているとき、自分のことを少しでも分かろうとしてくれる誰かの存在は、温かく大きいものだろう。極端に言えば、自分のことを分かろうとしてくれる人がそばに居てくれれば、たとえそこに多少の誤解や沈黙があろうとも、分かろうとしてくれるという、ただその一点で温もりが伝わり、気持ちと和らぐことがある。こうした事象を指して、Sotoでは「心の居場所」という言葉を使っていることを押さえておきたい。

上記のようなトレーニングを経て、相談現場ではどのようなことが起こっているのか、次節ではSotoの協力によつて本願寺派が活動を展開してきた東日本大震災での対人支援活動、仮設住宅居室訪問活動の実際についてみてゆく。

### 第三節 東日本大震災における対人支援の事例から考える

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災では、一五、八四四名の死者、二、二九四名の行方不明者、全壊棟数二二八、五〇三戸という未曾有の被害があった<sup>12)</sup>。仮設住宅の供給戸数は、建設型仮設五三、一九四戸、賃貸型仮設(みなし仮設)六九、六一六戸、計一二一、八一〇戸、最大入居者は三一六、〇〇〇名にも及ぶ<sup>13)</sup>。こうした中

で、本願寺派が Sotio の協力を得て活動を展開した「仮設住宅居室訪問活動」<sup>13</sup>が二〇一一年一月～二〇一六年三月までに主に関わったのは、宮城県名取市と、岩手県陸前高田市の仮設住宅であった。<sup>14</sup>

東日本大震災では数多くの支援の形があったが、大きく分けると生活に必要な物資を届ける「物的支援」と、「精神的支援（いわゆる心のケア）」と呼ばれる支援との二つに分けることができる。どちらの支援にも困難はあるが、とくに後者が悩ましいのは、支援者（相談員）が現場に入れば、ただちにそれを支援といえるのかという点であった。さまざまなアプローチが混在するなかで、「何をもって支援とするか」が明確になつていなければ、現場で混乱が起こるのは当然であろう。そこで本願寺派が行なう「仮設住宅居室訪問活動」においては Sotio の理念「自死・自殺にまつわる苦悩を抱えた方の心の居場所づくり」<sup>15</sup>のもとに活動が展開されることとなった。

ここで紹介するのは、震災から三年が経ち、津波によつて壊滅した街並みが、一度更地となつたあと、さらに復興に向けて工事が進むなかで、三度街並みが変わりつつある様子を見てゆく様子を一望できる丘の上に建設された仮設住宅で、筆者が出会ったある女性のエピソードである。

小高い丘に建つ仮設住宅から眺める景色の変化は、そのまま彼女の心の変化でもあったのだろう。いま目の前にある風景を眺めながら、彼女はふと、「どうしようもないね」と言った。自分の今ある状況を顧みてこぼれたつぶやきだったのだろうか。自分の住んでいた場所さえ思い出せない悔しさはいかばかりだろうと尋ねてみると、彼女は困惑した表情で、

「くやしいうつより、どうしようもないよね」

と、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「きつとさみしい思いにもなるんじゃないですか？」

と再び尋ねると、

「さみしいというか……」

少し笑いながら首を傾げる。自分の気持ちをどのように表現すれば、訪問してきたボランティア（筆者）に、伝えることができるだろうか、と考えあぐねているようだった。そして、「やっぱり、どうしようもないね」と繰り返すのだった。その声は、繰り返されるたびに自分のなかの感情を確認するように、ついには確信するように変わっていった。

彼女にとつてそれは、「どうしようもない」という言葉でしか表現しようのない気持ちだったのだ。「くやしい」「さみしい」という言葉には載せきれない想いだったに違いない。私が提示した「くやしい」とか「さみしい」という出来合いの言葉では、彼女の中にあるざわめきを、掬い取ることなどできなかったのだろう。なぜなら彼女は、自身のざわめきを、彼女自身の言葉で表現しようとしていたのだから。「どうしようもない」という、その言葉で言う以外に、彼女にとつては術がなかったのだから。

「そうとしか言いようがないでしょうね」

そのことを伝えてみると、彼女は何度も頷きながら「どうしようもないね」と答えた。そのとき初めて、彼女の表情が和らいだように見えたのだった。<sup>17</sup>

女性の、「どうしようもない」という言葉でしか自分の気持ちを伝えられない、言葉になる前の気持ちとして、エピソード内では便宜上「ざわめき」と表現した。同じように筆者もその気持ちを感じ、受けとろうと自身の「ざわめき」のなかから言葉を替えながら関わりを努めたが、いずれ「そうとしか言いようがない」という言葉で、お互いのざわめきに焦点が合ったとき、気持ちと気持ちに触れ合い、気持ちの落ちつきどころとでも言いたくなる場

所に落ち着いた感があった。彼女の「どうしようもない」という言葉は、「くやしい」「さみしい」といったこちらで用意した既成の感情語では掬い取ることできない、固有のざわめきを含んだものであった。その言葉が、彼女自身の口から繰り返し語られ、やがて表情の変化として現れた過程は、気持ちが言葉のかたちを得ていく一つの過程として窺うことができる。同じ「どうしようもない」という言葉であっても、その向こうに動いている気持ちは少しずつ異なっているからである。

以上、本節では、現場で生じた気持ちの変化を提示するにとどめたい。

次章では、前節と本節で提示したSanoの関わりを能動／受動という枠組みとは異なる視点から説明づけるために、中動態の視座から検討を加える。

## 第二章 中動態という文法視座

### 第一節 中動態とは何か

はじめに中動態とは何かについて、これを極めて簡単に要約すれば、

自身が動作主である行為の過程に巻き込まれ、その動作主もまた生成変化するというあり方<sup>18)</sup>

を表現する、失われた文法のことである。いまこの要約を、気持ちに関わる対人支援に即して言えば、「相談員／相談者が動作主である行為の過程（相談現場）に巻き込まれ、その相談員／相談者がともに生成変化するあり方」

とすることができよう（序論で示したミルトン・メイヤロフの定義「ひとつの展開を内にはらみつつ人に関与するあり方であること。また、支援する／される当人同士が相互に成長し、その内実は相手との合一体験を生み出すこと」とも一致している）。

前章に提示した事例において「孤独感が和らぐ瞬間」とは、相談員が「した（能動）」こと、あるいは相談者が「された（受動）」こととして説明できるものではなく、その語りや応答、沈黙といった過程において、人と人との関係性のあいだに起こる変化という出来事のことであった。本章では、「孤独感が和らぐ瞬間」を能動／受動の枠組みに回収せずに、この事象を説明するために、哲学者の國分功一郎の説明に依拠しつつ中動態の概念を本稿の問題提起に関わる点においてのみ整理する。

さて、中動態とは、

かつてのインド＝ヨーロッパ語にあまねく存在していた態で〈中略〉古代―確認されている限りでは少なくとも  
も八〇〇〇年以上前の時代―より、インドからヨーロッパにかけての広い範囲で用いられてきた<sup>19)</sup>

という文法であり、フランスの言語学者のエミール・バンヴェニストが比較言語学において一九六六年に『一般言語学の諸問題<sup>20)</sup>』のなかで紹介した概念である。「中動態」という名称は、能動態と受動態の「あいだ」を連想させるが、そうではなく、能動／受動という二分法が成立する以前に能動態／中動態として存在していた態であり、能動態／受動態という区別それ自体が、実は歴史的に新しい区別であるという。以下、國分の説明を追う。

能動態と受動態の区別が新しいものであるとはどういうことかと言うと、かつて、能動態でも受動態でもな

い「中動態 middle voice」なる態が存在していて、これが能動態と対立していたというのである。すなわち、もともと存在していたのは、能動態と受動態の区別ではなくて、能動態と中動態の区別だった。<sup>(21)</sup>

したがって、

能動と受動の対立はふだん、あたかも必然的な対立であるかのように、われわれの思考の奥深くで作用している。そして、それをなぞるかのように文法も能動態と受動態の二つの態をもつ。しかし、もともとそれとは別の態が存在していたし、別の対立が存在していた。能動態と受動態の対立は普遍的でも必然的でもない。<sup>(22)</sup>

ひとたび能動態と受動態を対立させる言語に慣れ親しんでしまうと、この区別は必須のように思われてくる。日本語の話者であっても事情は変わらない。この区別を知ってしまうと、行為は能動か受動のいずれかであると思わずにはいられない。それ以外は思いつくことすら難しくなってしまう。<sup>(23)</sup>

と言う（この点は序論において指摘したとおりである）。では、能動／受動の対立と、能動／中動の対立との間には、どのような違いがあるのだろうか。

能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立として描き出すことができます。これは行為や動作の方向性に依拠する定義です。矢印が自分から外に向かえば能動だし、矢印が自分に向けば受動となるわけです。<sup>(24)</sup>

一方、これに対して、

能動態と中動態の対立においては、「する」か「されるか」ではなく、「行為や出来事の」「外」か「内」かが問題になっているということです。主語が動詞によって名指される過程の内部にあるときには中動態が用いられ、その過程が主語の外で終わるときには能動態が用いられた。<sup>(25)</sup>

※(一)内は筆者補足

つまり、能動／受動の対立が、主語と動詞との関係を行為の方向によって区別するのに対し、能動／中動の対立が、主語が動詞によって示される過程の内部にあるか外部にあるかという点で区別されることに注意したい。

また、國分は能動／中動の関係をバンヴェニストがギリシア語より引き出した *media tantum* (中動態のみの動詞) の例から以下のように補足している。

何かが「できる *dyvavai* (デュナマイ)」とは、主語が、それを為し得る能力の發揮される座に在ることを意味する。誰かが何かを「欲する *bovovai* (ブローマイ)」のは、心のなかからわき起る欲望ゆえのことであり、この欲望によって突き動かされる過程のなかに主語はある。〈中略〉主語は、その過程の行為者であって、同時にその中心である。主語〔主体〕は、主語のなかで成し遂げられる何ごとか——生まれ、眠る、寝ている、想像する、成長する、等々——を成し遂げる。そしてその主語は、まさしく自らがその動作主〔agent〕である過程の内部に在る。<sup>(26)</sup>

では、中動態とは文法上具体的にどのようなように表現されるものなのか、國分はジョージ・ハワードの論文を引用して英語とギリシア語との比較から中動態の特質を以下のように説明する。

英語では、動詞は二つの態のうちのどちらか一つで表現され得ます。つまり能動（私が押す）か受動（私は押された）です。英語には三つめの態はありません。主語と述語の関係を表現する別の方法はないのです。主語は能動か、さもなければ受動でなければなりません。〈中略〉「説得する persuade」という動詞のことを考えてみましょう。英語ではそれは能動態として「私は説得する I persuade」と表現されるか、あるいは、受動態として「私は説得される I am persuaded」と表現されるかのどちらかです。「しかし」ギリシア語では、*peitho*（私は説得する）は、中動態を用いて *peithomai* となり、これは（中動態を英語でできる限りうまく表現してみるとすれば）「私は自分を説得されるがままにする I let myself be persuaded」となります。<sup>(47)</sup>

以上を踏まえて、ようやく本節冒頭の「ごく簡単に要約すれば、中動態とは、自身が動作主である行為の過程に巻き込まれ、その動作主もまた生成変化するというあり方である」という簡潔な要約に辿りつくことができる。この要約を再度、対人支援の文脈で言い換えれば「相談員／相談者が動作主である行為の過程（相談現場）に巻き込まれ、その相談員／相談者がともに生成変化するあり方」とすることができると言える。この要約を通して、次節では第一章第二節、第三節で示した事例について、再度検討を加えたい。

第二節 中動態から読み直す「孤独感が和らぐ現場」

第一章第二節「模擬相談（ロールプレイ）の事例から考える」の『Sono 式 相談対応の基本トレーニング方法』の事例において、相談者（煩雑さを避けるため以下、コーラー）の孤独感が和らいでいく過程は、相談員（同以下、メンバー）が一方的に相手の孤独感を和らげさせたのではない。むしろ、互いの語りの往復のなかで、互いの気持ちに触れ合う生成変化の関係性が出来ることによつて、結果として孤独感が和らいでいったと理解するほうが適切である。ここで生起している変化は、「メンバーが変えた」「コーラーが変えられた」という能動／受動の文脈ではなく、「関係の場において互いに変化が起こった」と表現されるべきものである。

模擬相談の事例において、メンバーは「励まそう」「導こう」といった意図的な介入をしていない。むしろ、コーラーの言葉に応答しながら、その都度生起した自身の気持ちを率直に言葉として差し出している。ここで生じているのは、メンバーがコーラーを「変えた」という出来事ではなく、コーラーの言葉をめぐつて、「両者が関係の過程に巻き込まれ、その過程のなかで、両者の様相が変化していく」出来事である。

具体的な箇所であれば、「全部、嘘やったんやっと思うと……」（C4）というコーラーの言葉に対して、メンバーが「悲しくなるねえ」（M4）と応答した場面では、コーラーは何度も頷き返している。ここで重要なのは、両者の関係において一つの「気持ち」が共有されたという点である。コーラーは、自身の苦悩をそのまま受けとつてもらえたという感覚を得るなかで、語り続けることが可能になっていく（同節、「相手を変え（支配・所有し）ようとする支援」の模擬相談の事例のなかで、コーラーから会話を打ち切ったのとは対照的である）。

また、「じゃあ、もう死のうと思ってる？」（M9）とメンバーがコーラーの言葉に先んじて踏み込む場面におい

ても、相談者の死にたい気持ちは「引き出された」のではなく、関係場において「おのずと語られるもの」として立ち現れている。ここで生起している変化は、相談員が「した」ことでも、相談者が「された」のでもなく、相談という関係の場において「出来事」として生起したものである。

以上のことから、模擬相談の事例において「孤独感が和らぐ瞬間」は、能動／受動という関係で説明される出来事ではなく、コーラーとメンバーとの間で形成された関係過程において生起する中動態的出来事として理解される。すなわち、前節の要約「相談員／相談者が動作主である行為の過程（相談現場）に巻き込まれ、その相談員／相談者がともに生成変化するあり方」が形成されたのであり、ここに生じているのは、メンバーがコーラーを変えたという変化ではなく、関係の場（相談の現場）に巻き込まれた両者がともに生成変化していく過程であると説明することができる。

第一章第三節で示した仮設住宅居室訪問活動における女性の事例においても同様である。「どうしようもない」という言葉をめぐるやりとりは、筆者が彼女の心情を操作した結果ではない。彼女自身の言葉に対して、筆者は率直に言葉を差し出したつもりであるが、それは彼女の気持ちとは微妙な齟齬があった。ようやく彼女の繰り返す言葉から気持ちに焦点が当たったとき、気持ちと気持ちが触れ合う関係性の場が生起し、その場のなかで彼女／筆者の心情に一つの落ち着きどころが「生まれた」と捉えることができる。

ここで生起しているのは、筆者が彼女の気持ちを「理解、把握した」という出来事ではない。ましてや、彼女の気持ちに筆者によって「和らいだ」という出来事でもない。むしろ、彼女の言葉をめぐって、彼女と筆者とのあいだにひとつの「言いようのなさ」が共有され、その共有の過程のなかで、彼女（と筆者）の気持ちが落ち着きどころを見いだしていった出来事であった。この変化は、「私／彼女がした」「彼女／私がされた」という構造によって

捉えられるものではなく、彼女と私との関係性の場において出来事として生じたものと理解されるべきである。すなわち、この場においては、彼女の「どうしようもない」という言葉をめぐる関係過程（相談現場）のなかに、筆者自身も巻き込まれ、彼女とともに生成変化していたと捉えることができる。こうした生成変化の過程において、彼女の表情が和らいだという事実は、孤独感が和らぐ瞬間が、関係の場において生起していることを示している。繰り返すが、この出来事は、支援した／支援された結果として説明されるのではなく、人と人とのあいだ（場）に立ち上がった出来事として理解されるべきである。

これら二つの事例が示しているのは、気持ちに関わる対人支援における本質的な変化は、人と人との関係性のあいだ（過程）に成立する「場」において、「出来事」として生じるとい点である。この出来事は、「した／された」という関係を超えて、そうした関係に「なった」と言い直すこともできよう。<sup>(28)</sup> その出来事のことを「心の居場所」と呼んでいるわけである。

## 小 結

本稿では、「自身が動作主である行為の過程に巻き込まれ、その動作主もまた生成変化するあり方」と説明される中動態という文法概念を手がかりに、自死に関わる対人支援の現場において生起している関係性の変化について検討した。そこから明らかになったのは、能動／受動という文法バイアスでは支援の捉え方を見誤る可能性があることだった。「支援する」という言葉から連想される能動／受動という文法の延長線上には「相手を変え（支配・所有し）ようとするとする支援」の他を思い浮かべることが難しい。あるいは「心のケア」「寄り添う」などの言葉も、この文脈で捉えられると同じく「相手に変化を求めようとする（またはそのことを期待する）」支援が開始されて

しまうことになるだろう。<sup>(20)</sup> このバイアスから逃れることは極めて困難なのである。試みにいま Sotio の活動をこの文脈に載せて説明すると、「死にたい気持ちを抱えた方の孤独感を和らげる。」と能動／受動の形になるのは、文法上避けて通ることができない。これは、支援に対する行為の表現を能動／受動でする以外に我々がその表現を持ち合わせていないからであることを本論で明かした。その上で Sotio が目指す対人支援とは「支援した／支援された」という、能動／受動という関係を超えて互いに気持ちに変化する場であり、平たく言えば「相手が本音を話してくれた」「自分の本音を話せる場になった（さらにいえば、本音は語られずとも、ともにその場に居られる）」という事態が、ひとつの支援となる機序を説明した。

このことを踏まえ、Sotio の模擬相談（ロールプレイ）および仮設住宅居室訪問活動の具体事例において見られたのは、「孤独感が和らぐ瞬間」が、相談員の一方的な行為によって生じるものではなく、両者が相談という過程の内部に巻き込まれ、<sup>(21)</sup> そのなかで相互に変化する出来事、すなわち「相談員／相談者が動作主である行為の過程（相談現場）に巻き込まれ、その相談員／相談者とともに生成変化するあり方」として説明づけることで、文法範疇から支援のあり方を整理しなおし、気持ちに関わる対人支援の一つの形態を論理づけた。

#### 【註】

- (1) もちろんそうした支援が必要な場合もあるだろう。本稿は、気持ちに関わる支援についての一形態を論理づけることを目的としており、特定の団体や心理療法について批判する意図はない。
- (2) ミルトン・メイヤロフ／田村真・向野宣之訳『ケアの本質』（ゆるみ出版、一九八七）一三一―一四頁
- (3) ミルトン・メイヤロフ『同書』一九頁
- (4) Sotio はこの定義をもとに活動しているわけではないが、いまは支援を能動／受動で捉えることを問題とするために引用していることを断っておく。

- (5) 総研では二〇〇七年より自死問題の取り組みを進めており、二〇〇八年五月には、本願寺派の全寺院（二〇二八ヶヶ寺）を対象とした自死問題に関するアンケート調査「自死問題実態調査」を実施している（分析結果は総合研究所ホームページ <https://soken.jp/download/4836> にて全文閲覧可能）。
- その結果、二〇一〇年五月、当該実態調査をもとに僧侶と一般市民が集まり本願寺第三庁舎内に設立されたのがNPO京都自死・自殺相談センター Soto（代表・竹本了悟）である。二〇一〇年に電話相談窓口、自死遺族の会を開設したことを皮切りに、二〇一五年現在、メール相談や、相談員と直接対面で時間を過ごす居場所づくり活動としての「おでんの会」、「Sotoの縁がわ」など相談活動の場を広げている。
- 二〇二四年度の延べ相談件数は、おおよそ以下のとおりである。電話相談（金曜・土曜の一九時～二五時）一〇〇〇件程度。メール相談 二五〇〇件程度。居場所づくり おでんの会 一四〇名程度。語り合う会（遺族支援）一五名程度。そのほか啓発活動として自死にまつわるシンポジウムや研修会なども定期的に行っている（筆者もこの活動に二〇一一年より参加しており、東日本大震災の被災地支援活動においては、総研の職員とSotoの相談員という立場で「仮設住宅居室訪問活動」を展開してきた。詳細は第一章第三節）。
- (6) このように言うところ「自死を推奨するのか」という批判の声が上がることもあるが、「自死を推奨すること」「死にたい気持ちを抱えた方の最後の居場所（誰かが分かってくれ、分かってくれようとする場）を提供することとの間には、大きな隔たりがあることを指摘しておきたい。
- (7) Soto 理事の金子宗孝氏よりご提供いただいた記録に加筆修正したものである。金子宗孝氏には、この場を借りて感謝致します。  
<https://www.youtube.com/watch?v=mnkGibXygl>（二〇一五年二月三日現在）を参照された。
- (8) 相談者を、電話をかける人コーラーといひ、相談を受ける人をメンバーと呼ぶが、これは飽くまで両者の混乱を避けるための記号であり、対等な人間であることを前提としている。
- (9) それまでの相談員、相談者という関係を離れる宣言をすることで、場を切り替えてから、それまでの相談について検討するふりかえりに入る。宣言以降は相談の場ではないということを意識的に区別する（関係の場を切り替える）ためである。
- (10) 『宗報』二〇一四年二月号 一三一―一六頁で紹介した事例を加筆したものである。
- (11) 『宗報』二〇一四年二月号 一三一―一六頁で紹介した事例を加筆したものである。
- (12) 復興庁「東日本大震災教訓継承サイト」(<https://www.reconstruction.go.jp/311kyoukun/archive/chapter1-verse1.html#chapter1-verse1-1>) 二〇一六年一月二日現在
- (13) 復興庁 同サイト (<https://www.reconstruction.go.jp/311kyoukun/archive/chapter5-verse2.html#chapter5-verse2-1>) 二〇一六年

年一月二日現在

- (14) Sotio のボランティア養成講座を受講した現地ボランティアが二人一組で仮設住宅を二軒一軒訪ね、お住まいの方の気持ちを受けとるという活動。二〇二五年現在、仙台での活動は Sotio の姉妹団体「東北自死・自殺相談センター(とうほく Sotio)」(代表: 高橋悦堂) として、居場所づくり活動「そっとの森」を毎月仙台別院内教化センターにて開催している。陸前高田市では、「陸前高田市傾聴ボランティアこころのもり」(代表: 西條正夫) として活動が継続される。Sotio の姉妹団体としてほかに「ひろしま Sotio」(代表: 武田慶之) がある。
- (15) そのほか、毎月行われた傾聴に取り組む宗教者の会 (2022 代表: 太田宏人(故人)) で、宮城県牡鹿郡女川町での活動にも合流してゐる。
- (16) Sotio ホームページ (<https://www.kyoto-jsc.jp/about/thoughts.html>) 二〇二六年一月九日現在
- (17) 拙稿「ざわめきと声の汽水域」鈴木岩弓・磯前順一・佐藤弘夫(編)『死者／生者論―傾聴・鎮魂・翻訳―』(二〇一七年) 一〇三―一〇四頁
- (18) 青山太郎『中動態の映像学 東日本大震災を記録する作家たちの生成変化』(堀内出版、二〇二二年) 五頁
- (19) 國分功一郎『中動態の世界 意思と責任の考古学』(医学書院、二〇一七年) 四一頁
- (20) 岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』(みすず書房、一九八三年)
- (21) 國分功一郎『同著』三四頁
- (22) 國分功一郎『同著』三四頁
- (23) 國分功一郎『同著』三四頁
- (24) 國分功一郎・熊谷晋一郎『責任』の生成―中動態と当事者研究―』(新曜社、二〇二〇年) 九七頁
- (25) 國分功一郎・熊谷晋一郎『同著』九七―九八頁
- (26) 國分功一郎『同著』(新潮文庫版、二〇二五) 一一三―一二三頁
- (27) 國分功一郎『同著』(医学書院、二〇二七) 七五頁
- (28) 國分は『同著』で、こうした自動詞と中動態との間には密接な関係があることを指摘している(医学書院、二〇一七) 一八三―一八八頁
- (29) Sotio では、意識的に「心のケア」や「寄り添う」という言葉を使わず「気持ちを受けとる」と表現して、既存の用語から距離を置いてゐる。

(30) Some では、この事態を「コーラーとメンバーが共に揺れる」「メンバーがコーラーに揺らされる」などと表現している。